

---

# Locker\_No.4219

Hank.Wott

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

Locker - No . 4219

### 【Zコード】

Z6358P

### 【作者名】

Hank · Wott

### 【あらすじ】

全ては駅のロッカーからはじまる…

彼女が『不死の病』に冒された夏。

その病を彼女は「宇宙人との交信のせいだ」と言張っていた。

ある日、彼は駅の「インロッカー」で喋るヘッドセットに遭遇する。ヘッドセット曰く、宇宙人が地球を食肉生産プラントとして利用すべく密かに侵攻を開始、その一環として優良株と見なされた彼女は

耐死ワクチンを打たれたのだとか。

不死となつた彼女を死なせるには『九級吸命士』なる宇宙政府認定資格が必要であり、それには、30日の間に指定された30人の命を奪い、4219番のロッカーに収めなければならないのだと言う。そしてその日から、彼は『吸命士』として、九級目指して人間狩りを開始するのだが：

「私を一人残して死ぬのって、理不尽じゃない？」  
というのが、彼女の言い分だった。

「そうは言われてもな…」

短く刈り込んだ黒髪をめんべくさそうに搔き回して、彼は困りきった表情をしていた。それはそうだろう。この要求が「不治の病に罹つたから一緒に死んで」だとすれば、なるほど、不可能なわけではない。それくらいには、彼と彼女の関係は深かつた。しかし、

「いくら万能な俺でも、出来ることと出来ないことがあるんだよ」  
近年、飛躍的に延命技術が発達し、人類の平均寿命が百を軽く越えるようになったとは言え、人とは、生物とはいつか死ぬからこそ、今生きている物、なのだ。彼がどう頑張ったとしても、いずれ限界が来るのは明白だ。そして、どんな理由であれ嘘を吐くというのは彼の性分ではなかつた。

「じゃあ、私と同じになればいいじゃん」

「あのな、俺だって出来るならそうしてやりたいけど、お前のその『不死の病』とやらは突然変異みたいなもので、万人に起きるわけじゃないの。お分かり？」

「じゃあ、突然変異起こせばいいの？」

「変異起こせばいいって、どうやつてさ？」

「キミも宇宙人と交信するんだよ。こうやって…」

ぎゅっと両目を瞑つて、両手で以つて耳を塞いだりしている彼女に、また始まつた…、と彼は小さく溜息を吐いた。彼が待ち合わせに遅れた日に限つて駅前でぶつ倒れ、運び込まれた先の大学病院で『不死の病』なる診断を受けて以来、彼女はことあるごとに宇宙人の話題を持ち出すようになった。何でも、自分の身体に起きた突然変異は、宇宙人との交信のせいだと思い込んでいるらしい。

ある日突然自分は死なないのだと告げられ、原因不明、治療法も不明では、そんな突飛な発想でもしないことはやつていけないのだろう。それとも、案外、精神的ストレスにやられて本当に幻聴でも引き起こしているのかもしれないが。

「ねえ、ほら、聞こえるでしょ？…ねえ、ねえってば！！」

「あー、はいはい。聞こえる。すゞーくはつきり聞こえてるよ、お

前の声が

「もー。キミ、絶対私のこと信じてないでしょ」

「そんなことないよ、うん、そんなことはない。」

「嘘だ」

「俺は、嘘だけは吐かない」

「…でも、本当のことも言わないよね」

彼が言葉に詰まつたのは言うまでもない。

「それじゃあ、俺はこの辺で…」

立場が悪くなつて、彼は慌てて立ち上がつた。

「えー、もう帰っちゃうの？」

彼女は不満気だが。

「今からバイトなんだよ。また明日来るから。宇宙人発言もほどほどにして、さつさと退院させてもらえ」

現在、彼女はすこぶる健康体である。むしろ、以前より体調が良くなつてゐるぐらいである。あとは専属の心理カウンセラーからOKが出さえすればいいのだが、彼女はずつとあの調子だから、それがなかなか難しい。

「キミ、私を信じないと、絶対後悔するんだから。宇宙人は絶対、絶対居るんだからね！！」

「はいはい

氣のない返事を返して、彼は仮頂面の彼女の鼻先で扉を閉めた。

「宇宙人ねえ…」

正直、出遭えるものなら出遭つてみたい、と思つ。突然変異でも何

でも構わないから、とにかく、彼女と同じになりたかった。

「案外、こういうところに入っていたりしないかな、宇宙人」駅のコインロッカーの扉を開きつつ、そう、それは、宇宙人がこんなところに、否、この世界に居るはずなんてない、という確信の下の呟き。そして、

「……」

当然、宇宙人が入っていたりはしなかった。その点においては、彼は間違つていなかつた。が、

『 よう、兄ちゃん。お困りのようだな。手を貸してやろうか?』  
喋るヘッドセットは、確かに、間違いなく、彼の目の前に存在していたのだった。

## 1st day(後書き)

ヘッドセシットと救急救命士と不治の病が同時に脳裏に閃いた瞬間この悲劇は起つた…

思いつきつて恐い。  
てか、単なる駄洒落だよ（寒つ。

工口描写は一切ありませんが、読んで字のごとく「吸命」なんで、  
まあ、キスは工口だと言う人は注意してください。  
一応、前書きには書きますけどね。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n6358p/>

Locker\_No.4219

2011年1月4日02時00分発行